

# What's up now!

SJホット・インタビュー

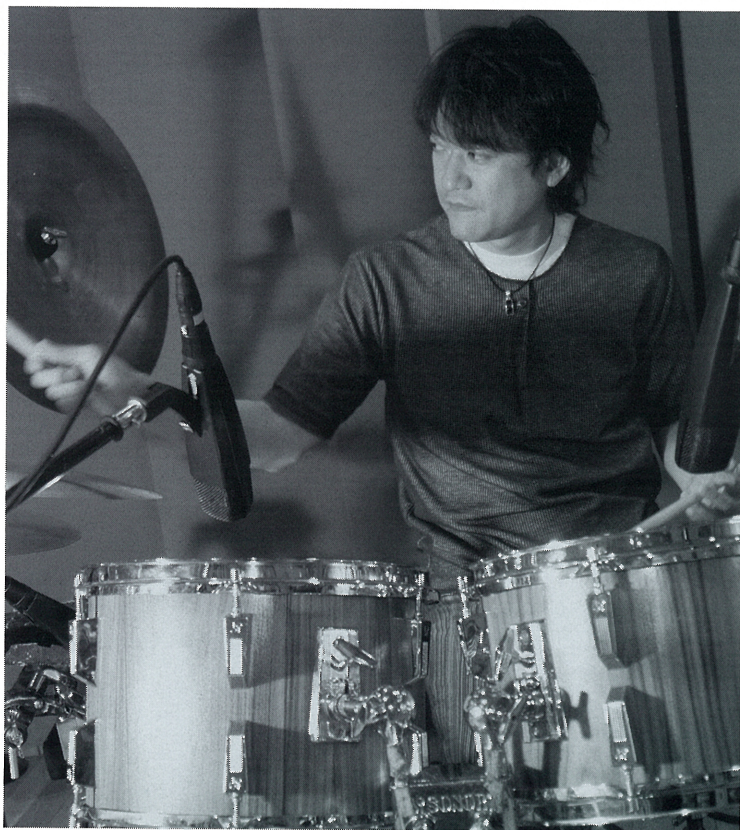


Photo Courtesy of M&I Company Ltd. / Sky of King Record Co., Ltd.

## Taro Koyama

小山太郎 (ドラムス)

ドラムは、車に例えるならエンジンでトルクを与える大事な役目があります

●インタビュー・文 高木信哉

小山太郎のメジャー・デビュー作『ドラムジェニック』が好評だ。近藤和彦、田中裕士、井上陽介という若き実力者たちが勢揃いした作品で、驚異のテクニックを持つ小山太郎のドラムの魅力と現在進行形の日本のジャズの最良の姿を捉えている。角田健一ビッグバンド、

辛島文雄Terzett、守屋純子セブテットなどで活躍し、引っぱりダコの人気を誇る小山は、いかにしてプロ・ドラマーの道を歩んできたのだろうか？ 小山は、オーディオ・マニアであり、無類のジャズ愛好家の父親の影響で、幼いころからジャズが好きだった。「生まれたときから、いつも

家には大音量でジャズが流れていました。ドラムは、小学5年生から始めました。卒業文集にも“将来の夢はジャズ・ドラマーになること”と書きました。中学校に入学と同時に猪俣猛のドラム・スクールに入りました”。故郷の栃木県佐野市から毎週ドラムを習いに東京へ通った太郎少年は、メキメキと腕を上げ、高校1年生になるともうドラム講師を務めていたというから、物凄い。そして高校卒業と同時にプロ入りした。「プロ入り以来ずっと忙しく、いいバンドで働いてきました。96年からは大先輩の渡辺貞夫さんのバンドに居たのですが、一旦自分をリセットしたくなって、99年～2003年までニューヨークに行きました。2004年1月に帰国し、新たな自分の始まりです。ですからこのアルバムは、僕にとってターニング・ポイントとなる重要な意味を持った作品なのです」。「僕は、ただテクニックに優れた人でなく、景色を感じさせてくれるようなミュージシャンが好きです。今回、参加してくれた三人は、実力も申し分なく、素晴らしい音の創造力を持っています。だから僕が心の中で見えた音楽を、皆が具体的な形にしてくれました。会心の作品に仕上がりました。リッチー・バイラークの<エルム>、チコ・ハミルトンの<ブルー・サンズ>、<テイク・ファイブ>やオリジナルを僕らがいかに料理しているかを味わって欲しいです。また僕は、ブラッシュ、マレット、スティック等持ち替えながら、曲の景色や色彩感を変えているので、その辺を楽しんで欲しい」。世界の一流ミュージシャンは、皆、いいドラマーを選ぶ。小山は、2005年には7枚ものレコーディングに呼ばれた。ジャズは、リズムが命である。車好きな彼は、ドラムをこう語る。「ドラムは、車に例えるならエンジンで、トルクを与える大事な役目があります。ですからやっているととても楽しいですね」。